第１５号

平成２４年（２０１２年）２月発行

支援員だより

発行者：山口県・財団法人山口県ひとづくり財団

もくじ

Ｐ１　支援員さんの声
Ｐ２　秋吉台の山焼きについて
Ｐ３　環境学習を振り返る 15 年
Ｐ４　里山で巣穴の観察を楽しむ

支援員さんの声

日々の生活の中での自然に対する思いや活動の様子をお寄せいただきました。

今回は、支援員研修会や県内で実施された保全活動等に参加された山根稔夫君（小学４年生）の声をご紹介します。

山 根 稔 夫

ぼくは、支援員になる前からお母さんといっしょに色々な生き物の観察会に参加してきました。

生き物の中で、ぼくが一番好きなのはカエルです。カエルのどこが好きかというと、目がくりくりっとしているところや、おなかがぷにぷにっとしているところです。植木鉢のかけらのすきまから、子ガエルがこっちをのぞいているのが特にかわいいです。

カエルを好きになったきっかけは、小学２年生の時、秋吉台エコ・ミュージアムであったカエルの産卵池づくりに参加してからです。みんなで協力して穴をほり、防水シートをはってつくりました。池をつくったあと、カエルの卵のレスキューをしました。秋吉台家族旅行村のジャブジャブ池に産みつけられたヤマアカガエルとニホンヒキガエルの卵や、秋吉台エコ・ミュージアムのそばを流れる三角田（みすまた）川に産みつけられたモリアオガエルの卵を家に持って帰って育て、カエルになったら元の場所にもどす活動です。そのままにしておくと卵やオタマジャクシが流されてうまく育たないからです。

小学３年生の時、自由研究でモリアオガエルの卵からカエルになるまでを観察しました。何回も観察して、やっとカエルの前足が出る瞬間を観ることができました。前足が呼吸口のある左側から必ず先に出てくることもわかりました。

ところがこの間、科学のアルバムの「モリアオガエル」を見ていて、とてもびっくりしました。関東にいるモリアオガエルの前足が、右側から先に出ていたからです。不思議だなと思ったので、今年は、秋吉台の色々な場所からモリアオガエルの卵を集めて、育ててみるつもりです。そして、前足が右と左のどちらから先に出るのかを、もう一度観察してみようと思っています。

ゲゲゲのエコ森池（カエルの産卵池）づくり

前足が出てくるところ･･･出るのは一瞬、これはたまたま途中でひっかかった

モリアオガエルのオタマジャクシの口･･･目のように見えるのが、おもしろい

秋吉台の山焼きについて

山口県自然保護課

秋吉台では毎年２月に「山焼き」が行われ、全国から多くの観光客が訪れます。

「山焼き」は、観光にも寄与していますが、実は、秋吉台の草原を保全し、多様な生きものを守るために行われています。

今回は、「山焼き」についてご紹介します。

１　山焼き

草原は自然の状態では、森林へと変わっていくと考えられており、春先のまだ草本の新芽が出ない時期に、野山の枯れ草を焼くことにより、この変化が止まり、草原が維持されます。また、山焼きにより、有機物の蓄積を減らし、無機塩類とすることで、新たに出る若草のための肥料とする効果があるとされています。草原を維持するため、秋吉台以外でも、日本各地で山焼きや野焼きが行われています。

秋吉台は、昔から採草地として利用され、山を焼き、伸びた草を肥料や飼料用に刈ることで、草原が保たれてきました。しかし、今日では草がほとんど利用されなくなり、山焼きも行わなくなれば、草原が維持できなくなります。

山焼きを行うためには、当日の「火入れ」だけでなく、「火道切り」（防火帯のための草刈り）が必要ですが、過疎化や高齢化が進む中、これらの作業を地元の方だけで行うのは、大きな負担となってきています。このため、現在では、地元の方だけでなく、多くのボランティアの皆さんの協力により、山焼きが行われています。

このように、秋吉台は人との深い関わりの中で草原が維持され、そこにすむ生きものの多様性や景観が守られているのです。

２　希少種との関係

山焼きは、草原を維持するとともに、不必要な枯れ草を焼くことにより、日当たりを良くし、希少な植物も保護しています。

オキナグサもそのひとつで、レッドデータブックやまぐちでは、絶滅危惧ＩＡ類に分類されています。かつて、オキナグサは県内に広く生育していましたが、生育環境の悪化や盗掘などにより、その数は減少しています。

植物だけでなく、希少な動物も保護しています。山焼きにより食草を残すことなどにより、動物たちの生育環境を保っているのです。

支援員の皆さんも秋吉台の山焼きにボランティアとして参加してみませんか。

写真はいずれも松井茂生氏提供

＜自然保護課からのお知らせ＞

近年、イノシシやシカによる農林業被害が深刻化していることから、平成２３年度から新たに、緊急的かつ総合的な鳥獣被害防止対策を実施しており、捕獲の強化の一環として、狩猟期間の終期を 3 月 15 日から 3 月 31 日まで延長することとしました。山に入る機会があれば、目立つ服装に心がけるなど注意をお願いします。周りの方にもお知らせいただきますようお願いします。

環境学習を振り返る15年

第２回研修会講師　宇部環境技術センター　後 藤 益 滋 氏

山口県は、三海（瀬戸内海、日本海、響灘）に囲まれ、海岸線の総延長が約 1,500 km（全国第６位）、２級河川の数が 433、河川延長 2,210 km（ともに全国第２位）と地理的にも変化に富んでいる土地柄です。これらを知ってか知らずか、よく周りからは“非常に自然が豊かですね”の言葉を頂きます。私は、元々関西の出で本県には所縁もなく、大学時代にその豊かさにほれ込んで現在に至っています。一番印象的なのは海産資源が豊富（最近、減ったとは言われているが）なことで、これだけでも誇りにできる貴重な郷土の財産と自慢したくなる位ですし、もっと PR をすれば全国的に注目されるのではと常々思っています。

今回は、“干潟”というテーマに絞って少し紹介させていただきます。干潟は一見、ただの砂、泥が集積した場所で色彩変異も少なくモノトーンなイメージを抱かれるかもしれません（写真上：南若川河口・山口市二島）。端的には川から供給される豊富な栄養分のフィルターとしての役割や、甲殻類、貝類等の小型動物から鳥などの大型動物の生息場、餌場として重要な機能を果たしています。無論、我々はその恩恵を直（間）接的に受けているのです。

しかしながら、瀬戸内海ではここ半世紀の間に埋め立て等によりその大部分が消滅しています。幸いにも県内の佐波川、椹野川、厚東川、木屋川河口干潟は、干拓によってその規模が縮小しているものの残存しており、最後の楽園とも言えるでしょう。干潟に降り立つと、平坦な泥、砂環境が存在するのではなく、流れもあり（澪筋：みおすじ）、起伏もあり、ヨシ等、植物が生い茂っている場所など、多種多様な環境を展開しており、出現する生物も異なります。特に、目立つのは無数の穴（写真下：木屋川河口干潟・下関市小月）で、これはなんですか？と聞かれることもしばしば。すべてオサガニ類やテッポウエビ等の甲殻類、マテガイ等の貝類が掘った巣穴なのです。干潟の泥、砂は非常に粒子が細かいため、嫌気化が進行しやすいのですが、巣穴を掘ることで自然と耕運され、それを防いでおり、健全な干潟の指標ともなります。また、夏季、泥上に３本の筋が走っていたら、その末端には必ずカブトガニが見られ（写真左）、川を少し遡って、淡水域との際付近のヨシ原に目を向けると、片方のはさみ（鉗脚：かんきゃく）が大きく甲幅３cm以上もあるシオマネキ（写真右）が手招きしています。他県では滅多にお目に掛けることができない貴重なフィールドが数多く残されているのも本県の特徴なのです。私は、厚東川河口干潟に生息する甲殻類（カニ類）を中心とした下敷き（写真）を作成しました。わずか数ヘクタールの規模でもこれだけの種類が生息しているのです。

しかし、残念ことに県内には専門家が非常に少なく、後進の教育も今後の課題と言えます。環境教育に携わって 15 年、学生時代を含めると約 20 年。よい教材、よい授業を追求しがちですが、ちょっとしたノウハウを身につけるだけでもそこから枝葉が伸びていき、さらに別のテーマへと展開することに繋がります。それをいかに後世へと伝えていくか。私はまず、“百聞は一見に如かず”が重要と考えます。あとは、細く長く、参加しやすい環境づくりですね。

里山で巣穴の観察を楽しむ

第３回研修会講師　山口県立山口博物館　田 中 浩 氏

人家近くの裏山に、獣たちの通り道である「けもの道」が縦横に張り巡らされています。このけもの道をたどっていくと、タヌキやニホンアナグマのトイレであるためフン場や耕運機で耕したようなイノシシの採食跡、アナグマやキツネが掘った巣穴などが、発見できます。アナグマは子育てや冬眠を含め年間を通して、キツネやタヌキは子育てに巣穴を使います。私はけもの道をたどったり、発信機をつけたニホンアナグマを追跡することで、山口市内の市街地に隣接した裏山の調査地約 10 ㎢のなかに、160 個の巣穴を見つけました。巣穴は万遍なく均等に分布しているわけではなく、特に人里に近い裏山に多く分布しており、人里から離れた、奥の山に行くほど少ない傾向にありました。

巣穴（前面はテラス状になっている）

アナグマが子育てや冬眠など長期に利用する巣穴は、出入口が３ヶ所以上ある大きなものであることが分かってきました。出入口は大きく 30 ㎝以上あり、中からかき出された土で巣穴の前面はテラス状になっています。掘り出した土の量から考えると、巣穴内部は何十ｍにも及ぶトンネル網が発達していると考えられます。中には巣材を敷き詰めた寝室があり、大きな巣穴は受け継がれ何百年も使われているのではないかと思います。

生まれて２ヶ月の幼獣と母

巣穴は定点観察の場所として大変適しています。巣穴を利用した時にセンサーが作動して撮影できるようにしたビデオカメラを設置し、巣穴周辺での行動を記録しています。夜間は赤外線ライトにより、真っ暗な状態でも撮影できるようにしています。アナグマは巣穴周辺でどんな行動を見せるのでしょうか。まず、巣穴から出てくるとき、辺りを警戒し、においを嗅ぎます。出てきたらゆっくり鼻を上に向けにおいを嗅ぎ、安全を確かめ、おもむろに毛づくろいを行い、巣穴から離れ採食に出かけ、採食から帰った時は巣穴にすぐに入ります。巣穴には滞在しませんが、そばを通る時は巣穴に寄っていくようです。特に広く動くオスは活動する範囲内にある巣穴の多くを把握しているようで、においを嗅ぎながらやってきて、お尻にある臭腺を地面にひっつけるマーキングをして去っていきます。アナグマは時々巣穴のメンテナンスも行います。１つは掘り出しです。拡張するために中から土を掘りだしたり、巣材を外に運び出したりします。土や巣材を前足で抱え込んで後ろ向きで運び出していきます。巣材の持ち込みは周辺部の林床から落ち葉やシダなどの下草を両方の前足で抱え込んで持ってきます。

冬眠時、巣穴から出てきたアナグマの母仔

アナグマは、12 月に入ると巣外で過ごす時間は短くなり、活動は巣穴近辺が中心になります。12 月の中旬から２月の中旬までは冬眠します。オスは単独で、メスは春に生まれた子どもとさらに前年生まれたオスの子供などが加わり、多い時は５～６頭一緒に冬眠します。時々起きて、巣穴の前で毛づくろいをしたり、巣材を運んだりします。巣穴は、夏は外気より涼しく、冬は５℃近くまで下がることはありますが温かで、安全に休める空間です。そんな巣穴が皆さんの地域の里山にもあり、希少野生動植物も意外に近くでみつけることができるかもしれません。

フィールドワークは自分だけの発見ができる楽しい体験です。里山の探検をしてみてください。

発行元：（財）山口県ひとづくり財団　県民学習部　環境学習推進センター
〒754-0893　山口市秋穂二島 1062　　TEL 083-987-1110　FAX　083-987-1720
http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/learning/